

## 『 変化を恐れることなかれ 』

会長 安達克佳

昭和55年、教員に成り立ての頃、印刷にはろう原紙を使った。鉄筆とガリ版で学級便りなどを書き、輪転機で印刷した。その後、普通の紙から印刷できるようになった。すると、今度は、きれいに文字を書くために、和文タイプライター、ワープロ、そして、パソコンと道具は大きく変化した。今では、驚くほど高度なテクニックを簡単に駆使して、まるで業者が作成したように美しい書類を完成できる時代となった。しかし、その内容はどうか。この英研会報に巻頭言を書くのも8回目を迎え、これが最後となる。未熟な才能のため、うまく想いが伝わってくれたであろうか甚だ心配である。

今年度は、北海道中学校英語教育研究大会を渡島地区支部の函館市で開催した。講師の金森強氏(文教大学教授)からは、OECDの2030年プロジェクトが次期学習指導要領の背景となっているので、原文を読み、AIにはできない授業を目指すべきとの示唆を戴いた。それは、子どもたちに、自分で考え、知恵を練りあい、よりよいものを追求する力を育むことを目指している。やり通す力(Grit)が重要である。英語教育では、英語が使えても、想いをとどけられなくては、本当のコミュニケーションにはならない。

例えば、田尻悟郎氏、北原延晃氏、そして、金森強氏を講師に迎え、研修会と研究大会で様々な視点からたくさんの示唆をいただいた。また、夏季・冬季研修会、公開授業研究会など研究部を中心に多くの会員が力を合わせ、授業改善に取り組んだ。また、伝統ある英語暗唱大会、英語弁論大会、そして、英語祭の行事を通して、学校枠を越え、子どもたちの英語力向上につながるよう会員一丸となって取り組んだ。

大きな研究大会として忘れられないのは「英語でつながろう 函館 2013」である。東北大地震の起きた日の夜、この研究大会の実施を決定した。年度末の役員会の場である。国際理解教育研究会、高等学校英語教育研究会、そして、中英研の役員で世話人会をつくり、準備と運営に奔走した。その結果、小学校3つ、中学校3つ、高等学校3つの計9つの授業を白百合学園で実施できた。この経験があったからこそ、今回の北海道中学校英語教育研究大会函館大会を開催できたと確信している。運営では事務局および部長が最大限のリーダーシップを発揮し、部員も支えてくれた事で無事に終了することができた。力のない会長への多大な支援に感謝申し上げる。

むすびに、私自身へのカンフル剤である以下の言葉を進呈する。英語好きな子どもが増える日を夢見て、函館市中学校英語教育研究会のさらなる成長を願っている。

The snake which cannot cast its skin has to die. 脱皮できない蛇は滅びる  
As well the minds which are prevented from changing their opinions; they  
cease to be mind. Friedrich Nietzsche